



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東大第2期卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。平成30年、この連載が『臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

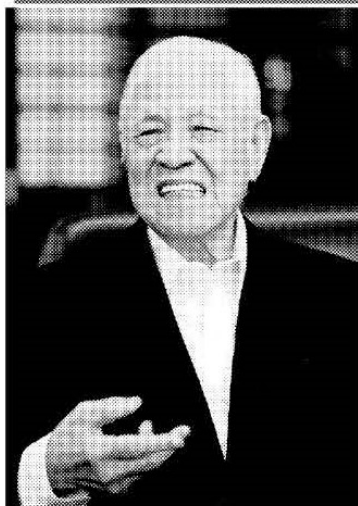
この連載のタイトルは「ニッポン臨終図巻」。亡くなられた日本の著名人取り上げのことを、暗黙のルールとしてきました。(1度だけ、ディープリンパクトの安楽死を取り上げましたが...)しかし今回は、この人を、どうしても書かずにはいられません。

日本の統治下時代の台湾で生まれ、日本名は若里政男。京都帝国大学(現・京都大学)で農業経済学を学び、「私は22歳(1945年)までは日本人だった」と仰っていたほどの大の親道家。

台湾出身者で初の台湾総統に就いた、民主化の父・李登輝さんが7月30日に台北市内の病院で亡くなりました。享年97。死因は、敗血症ショックと多臓器不全との発表ですが、年齢から

元台湾総統 李登輝

166



私は今から4年前の7月31日に、石垣島で李登輝さんとお会いしました。私の書いた『平穏死10の条件』という本の台湾版が話題となり、以来台湾と縁が深くなったのです。実は、台湾では尊厳死を認める法律(安寧緩和医療法)が20年も前にできました。

さらに昨年、「病人自主権利法」という、医者でも家族でもなく患者本人が終末期医療を選択する権利を保障する法律が、アジアで初めて成立しました。迅速なコロナ対策で世界から注目された台湾ですが、終末期をめぐる医療制度においても、我が国より何歩も先を行っているのです。

石垣島で李登輝さんと会ったとき、「今後も日台で協力し、終末期議論について情報交換をさせてください」とお願いをしました。笑顔で握手したとき、その分厚く温かい手の感触が今も忘れられません。李登輝さんは、死生観について、こんな文章を書かれています。

「死」は誰にとっても必ず訪れる最も大きな問題である。「生を知らず」に、どうして死を理解できようか」ではなく、逆に「死を知らずして、生を理解できようか」

「死」によって理解していくのが人間の智慧である(『熱誠憂国』毎日新聞出版)
まったく私も同じ考えです！
李登輝さんは、京都帝大在籍中であつた1944年、学徒出陣で日本陸軍に入隊しました。彼の兄上も、日本人として出征。マニラで戦死しています。お恥ずかしながら私は、李登輝さんの本を読むまで、「台湾人日本兵」についてよくわかっていませんでした。
太平洋戦争末期、台湾人にも兵役義務が課せられ、21万人が日本軍とともに闘い、3万人以上が戦死しているのです。李登輝さんだって、もしかしたら戦後75年のこの8月は、李登輝さんや台湾人日本兵にも思いを馳せて、平和の祈りを捧げます。

「死を知らずして、生を理解できようか」